慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代社会における都市と若者 : 匿名性と下位文化
Sub Title	City and the youth in contemporary society : anonymity and subculture
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2006
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.79, No.10 (2006. 10) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20061028-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代社会における都市と若者

――匿名性と下位文化――

有末賢

一　都市社会学と若者論
二　都市社会の変化と若者世代の変化
三　メディア空間の変容
四　匿名性と下位文化
　(一)　都市の匿名性の意義変化
　(二)　下位文化と支配文化の境界喪失
五　フラグメンテーション（断片化）と消費の全体性
六　都市空間のフラグメンテーションとミニ・東京
七　若者文化の現代都市的可能性

一　都市社会学と若者論

現代の若者論においては、フリーターやニートなど大人世代からの風当たりは強い。しかも、都市化の時代が

終わるにつれて、大都市生まれの都市第二世代が若者たちの主流となってきている。「都市と若者」というテーマに対しては、都市社会学と若者論という社会学の二つの領域からアプローチが可能であるが、本稿で私は、都市社会学から「都市と若者」というテーマに切り込んでいる。またさらに、若者論や世代論に対しても都市社会学の立場から論じていこうと思う。(1)

言うまでもなく、都市化の時代や成長型の都市においては、若者が農村から都市へ大量に移動し、労働力として都市定着へ向かっていった。日本の大都市で言えば、一九七〇年代までがほぼこのような成長型の都市であった。東京においては、一九八〇年代後半にいわゆる「バブル景気」時代に再び「東京一極集中化」の時代を経験するが、それらも一九九〇年代にはほぼ終息し、若者が都市をリードする時代も終わりを告げている。二〇〇〇年代に入ってからは、「少子高齢化」が本格的に進行し、むしろ、フリーターやニートなど、若者は受難の時代を迎えている。このように、都市社会の構造的変動に伴って、「都市と若者」というテーマも変遷してきている。日本都市社会学会の中でも高橋勇悦氏を中心とした「青少年研究会」の一連の著作（高橋勇悦編『青年そして都市・空間・情報』恒星社厚生閣、一九八七年、高橋勇悦・川崎賢一編『メディア革命と青年』恒星社厚生閣、一九八九年、高橋勇悦・藤村正之編『青年文化の聖・俗・遊』恒星社厚生閣、一九九〇年、高橋勇悦・内藤辰美編『青年の地域リアリティ感覚』恒星社厚生閣、一九九〇年）などに見られるように、情報化やメディア文化、サブカルチャーなどテーマも多種多様に広がっている。

現代の都市社会構造は、雇用の不安定、郊外化から再都市化、都心回帰などさまざまな構造変動を経験している。成長型都市から脱成長型へ、持続可能な都市開発などが課題とされているが、若者にとってもかつてのように、田舎から都会へ出てきた出郷者たちや「第二の故郷」を求める集団ではなくなっている。大都市二世、三世が若者の主流となり、マンションも団地もコンビニも携帯電話もパソコンも「当たり前」の世界となっている。

情報化は都市の時間・空間感覚を大きく変えつつあると思われる。つまり、若者文化が世代の中心的な価値を担い、団塊の世代による全共闘世代や対抗文化（カウンター・カルチャー）を形成してきた頃の「若者文化」とは、現代は様相を異にしているわけである。現代社会は、「少子高齢化社会」と言われ、子どもの数は少なく、若者たちには、フリーター、ニート、「引きこもり」の風当たりも強くなってきている。ヴァーチャル・リアリティだけが異常に膨らみ、「学力の低下」や競争についていけない子どもたちなど若者へのバッシングがなお続いている。(2)

都市空間においても、盛り場における若者たちの集合は今も見られるが、ファッションや流行、消費動向においても、大人たちの「仕掛け」、資本主義の貪欲、旺盛なシステム形成によって、「若者文化」は実は主体なき踊りを踊らされている感じも強いのである。一九六〇年代から八〇年代にかけて「竹下族」「たけのこ族」などの盛り場文化を生み出してきた東京・盛り場の若者文化も今では、ファッション界や店の商業宣伝に完全に乗っかっていると言える。

二　都市社会の変化と若者世代の変化

一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、都市社会の構造的変動は今までの成長型都市とは根本的に異なった性格を有してきた。バブル経済崩壊後の日本の都市社会においては、第一に脱成長型都市と言われる構造的変動が進行した。重厚長大型から軽薄短小型の産業構造に転換しつつあり、構造不況と雇用の不安定を招いている。特に雇用のミスマッチと言われる若年層の雇用対策は、フリーターやニートの増大など若者世代の変化にも大きな影響を与えている。この「脱成長型都市」の課題は、持続可能な発展や環境問題などもあるが、おそらく多文

表 1　大都市システムの発展段階

発展段階	分類タイプ	人口変化の諸特徴			
		中心	周辺	都市システム全体	
I　都市化	1　絶対的集中化	＋＋	－	＋	）全体的成長
	2　相対的集中化	＋＋	＋	＋＋＋	）
II　郊外化	3　相対的分散化	＋	＋＋	＋＋＋	）
	4　絶対的分散化	－	＋＋	＋	）
III　反都市化	5　絶対的分散化	－－	＋	－	）全体的衰退
	6　相対的分散化	－－	－	－－－	）
IV　再都市化	7　相対的集中化	－	－	－－－	）
	8　絶対的集中化	＋	－	－	）

（出所）David Clark, *Urban Decline*, Routledge, 1989, p. 9.

化・多世代の都市的世界における「共生」モデルの発見ではないだろうか。多文化共生については、グローバリゼーション時代の当然の課題であるが、多世代、つまり少子高齢化時代における若者と高齢者の共生もまた、二一世紀の都市の課題なのである。高齢者がマイノリティに押しやられていた時代から、逆に若者がマイノリティへと転落していく時代が現代だとすると、これからは、どのようにして若者たちと熟年・高齢者たちが共生を計るかが問われているのである。つまり、年の取り方、エイジング（加齢）が課題なのである。

第二には、都市化の時代の終焉から脱郊外化、そして近年の大都市の現象として注目されてきている「都心回帰」現象と都市社会の構造変動の問題である。都市化と郊外化を「都市化の構造」の発展段階の中に位置付ける試みとして、オランダのL・クラッセンらは人口増加ないし規模を中心に、都市化の段階を「地域サイクル」モデルとして提唱している。彼らによると、都市圏の都市化過程は、その中心都市と郊外における人口変化の大きさの組み合わせによって大きく四つの段階、細かくは八つの段階に分けることができる。[3] また、D・クラークは、大都市システムの発展段階を、絶対的か相対的か、集中化か分散化かを組み合わせて**表 1** のように、1～4までを全体的成長の段階、5～8までを全体的衰退の段階としてとらえている。[4]

このような都市化の発展段階の議論から何が見えてくるだろうか。都市化―郊外化―反都市化―再都市化の言わば「都市化の構造」は、単に郊外化が都市化の次に起こる現象としてだけではなく、郊外化もまた終焉していくことを示している。[5] そして、近年の都心部再開発や臨海副都心開発などによる「都心回帰」の現象も大きく影響している。容積率の緩和政策と景気刺激対策によって、東京都心地域では今や超高層ビルの建築ラッシュの状態である。そして、オフィスビルと併設する居住マンションなど「職住近接」あるいは「職住遊融合型」のライフスタイルなど「都心回帰」は確実に近年の傾向となっている。

都市社会の構造変動の第三の特徴は、脱近代型（ポスト・モダン）の価値観の出現である。第一に指摘した都市構造においても、脱成長型、持続可能な発展モデル、環境配慮型都市形成が模索されているが、都会人、東京人の志向もポスト・モダンに傾いている傾向が窺える。例えば、「大きな物語の終焉」に伴って、関心が私的生活に極域化し、生活における私化（privatization）現象が蔓延しているとも言える。ポスト・モダンの価値観は、個人主義、そして自己決定を重視している。この問題は、都市的共同性の課題ともつながっている。一九六〇～七〇年代においては、住民運動や公害反対運動などさまざまな社会運動を通して、コミュニティ（地域社会）の共同的課題を解決していくというライフスタイルが確実に定着してきた。しかし、一九八〇年代以降、いわゆる「異議申し立て」の運動という形式では、住民や市民の納得はなかなか得られなくなっている。つまり、その場限りの反対運動ではなくて、持続可能な自発的（ボランタリー）で公共的（非営利・非政府）な価値を追求しようとする新たなＮＧＯ、ＮＰＯなどの団体を創造していこうとする動きが活発化している。個人の自発性に基づき、自己責任と自己決定を原則とするポスト・モダンの価値観を前提としていると言えよう。しかし、自己責任と自己決定という個人主義の価値観は、都市的共同性を「幻想の共同性」であるとする意味で、私的生活への引きこもり、「私化」現象と紙一重である。[6] 高度情報化と高度消費社会の進展によって、私的欲望の極大化が進行

し、ヴァーチャルな欲求充足が日常化している。このような現代の都市社会における価値観の多様化とポスト・モダン化は構造変動として静かに進行しつつある。

以上のような都市社会の変化に対して、若者世代の変化に注目してみよう。本稿で若者と呼んでいるのは、主に一〇～二五歳を中心としている。義務教育である小・中学校時代を含み、今では九五％以上の進学率となっている高校、そして四〇％を超えている短大・大学の進学率を考慮すると、大学卒業まで（最短で二二歳）を一つの目印として、若年労働者を含む二五歳あたりまでが一般的に「若者」と言える年代ではないだろうか。若者世代の近年の変化の第一の特徴は、何と言っても多数派（マジョリティ）から少数派（マイノリティ）への転換という点である。団塊の世代（一九四七～四九年生まれのコーホート集団）ほどではないにしても、一九八〇年代くらいまでは、若者はまだ多数派であった。八〇年代後半くらいからの女性の短大・大学進学率の増大など、若者世代において男女平等の理念が少しずつ現実化していったのも特徴であろう。しかし、九〇年代以降、若者は世代間の少数派の地位に甘んじている。二〇〇六年の統計では、日本の幼年人口（〇～一五歳人口）は一三・七％で、若者（一六～二五歳）の割合も一六・五％であり、子どもの割合は、第一次ベビーブーム期後の一九五〇年には三五・四％もあったのに比べると半分以下となっているし、高齢化率（六五歳以上人口の総人口に対する割合）の二〇・四％よりもはるかに少ないのである。少子・高齢化社会や人口減少社会などと言われ、子どもの数が減っている現実がはっきりとわかる。

第二に若者たち内部における格差や差異の問題である。かつてのように、「若者」の価値観が「反体制」とか「カウンター・カルチャー」などの用語で統一的に語られる時代は既にはるか昔のことである。現代の若者たちの間には、学歴格差や学校格差、保守から革新まで、理想主義から現実主義まで、また家柄主義から能力主義までさまざまな価値観が共存している。子どもの頃からエリート教育を受けて、エリート志向の強い若者たちもい

ると思えば、反骨精神や反権威を大事にしている若者たちもいる。共同性や共同体志向の強い若者もいれば、孤独を好み、パソコンなどの機械だけが相手の若者もいる。携帯メールや携帯電話を離さない若者たちも多いが、かといって、自然探索や冒険が嫌いなわけでもない。要するに、若者たちの価値観がバラバラなのである。一口では言うことができない。よく言えば一人一人の個性が現れているわけである。しかし、それらの差異は、若者たち自身をも分断する格差としても作用している。かつてのような「若者たちの連帯」は、今は見ることができない。若者文化におけるフラグメンテーション（断片化）の問題は後述するつもりだが、若者たちのサブカルチャーは非常に多様化していて、異なる入り口から入った場合、決して交わることのない蛸壺型の下位文化を形成している。つまり、格差や差異が厳然と存在することによって、若者たちの可能性を狭くしている面も見え隠れしている。

若者世代の変化として第三に言えることは、エイジング（加齢）とジェネレーション（世代）形成が確実に遅くなっているという点である。戦前期には、一五歳という年齢は、子どもから大人への最初の通過儀礼であったが、今では中学校から高等学校へは同じ学齢期を通過するだけである。一八歳（高校卒業）、二〇歳（成人）、二二～二三歳（大学卒業）、二四～二五歳（大学院卒業から初職）とさまざまな通過儀礼が存在しているが、そこにはなかなか「大人になれない若者たち」がますます増加している。単に短大・大学進学率が高くなり、理系においては大学院修士課程も当たり前になってきているという高等教育期間の延長という現象だけではなく、初職が一～二年以内に変わってしまう転職の増加や、アルバイトなどで過ごし、正規の就職に就かない（あるいは就けない）フリーターの増加やニート（就学もアルバイトもしていない）の存在も指摘されている。このようになると、若者を二五歳で切ることも不可能だし、「一人前」の基準が、就職でも結婚でも出産・育児でも、どれをとっても適切であるとは言えなくなってきている。つまり、大人期の高齢化、子ども＝未熟期の長期化がはっきりして

きているのである。したがって、選択肢は多様化し、なかなかアイデンティティが確立されず、世代としての同一化が形成されないわけである。

三　メディア空間の変容

「都市と若者」を考察する上で、コミュニケーション・メディア（媒体）の変容は、社会関係の変化を見ていく上で、重要な契機となっている。戦後の都市大衆文化の中心は、何といってもマス・メディアであった。新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどのマス・メディアは戦後の都市性、大都市性を代表していたと言える。何故ならば、主要な新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどのマス・コミュニケーション・メディア各社は、東京を中心とした大都市に本社を置き、東京からのニュースや文化を地方へ、田舎へと流していたわけである。マス・メディアの類型について、図1のようなメディア（媒体）の性格から分類してみよう。図1では、横軸としてニュース性を左側に、文化（保存）性を右側に配置している。ニュース性とは、速報性もさることながら、日々起こっている事件や政治・経済・社会などの報道が主になっている。それに対して、縦軸は、メディアの種類として、上が音声、映像、口述を特徴とし、下側が文字媒体である。そうすると、文字媒体でニュース性、報道性からなるのが、新聞・雑誌であり、音声・映像媒体でニュース性を有しているのが、テレビ・ラジオである。そして、文化（保存）性とは、大衆文化としての側面であり、文字媒体は書籍を中心とした出版文化であり、音声や映像は映画・音楽などが入ってくる。これらを図示したものが図1である。

それに対して、現在のパソコン、携帯電話などのパーソナル・メディアの隆盛は、メディア空間を都市性から個人性へと変容させていった。マス・メディアの特徴は、画一化した大量の情報が、送り手から受け手へと一方

的に流れていくという図式である。それと比較するとパソコンや携帯電話、携帯メールの特徴は、パーソナルな情報を発信し、受け手としても情報を取捨選択し、相互交流も可能なメディアであると言う点である。近年のIT化、パソコン革命の根幹は、「軽薄短小」型と「携帯」性であろう。そこで、図1を参考にしながら、次にパーソナル・メディアの類型を作ってみよう。縦軸のメディアの種類は同じように、下が文字媒体であり、上が口述（映像）媒体である。そして、横軸は固定性ー移動性となってくる。つまり、固定的で文字媒体のパーソナル・メディアは、手紙・日記・手記などである。固定した声のメディアは、従来型の固定電話である。それに対して、パーソナル・メディアが移動性を獲得したために、いつでも、どこでも通信が可能となったわけである。移動性、携帯性において、文字媒体はメールであり、口述は携帯電話である。

これらを図示したものが図2のパーソナル・メディアの類型である。ある意味で、固定性と移動性の軸は連続

図1　マス・メディア（大衆文化）の類型

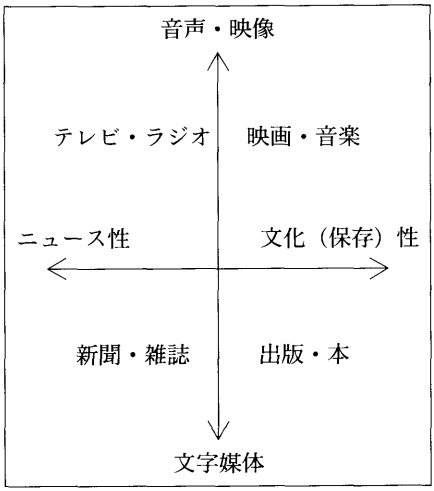
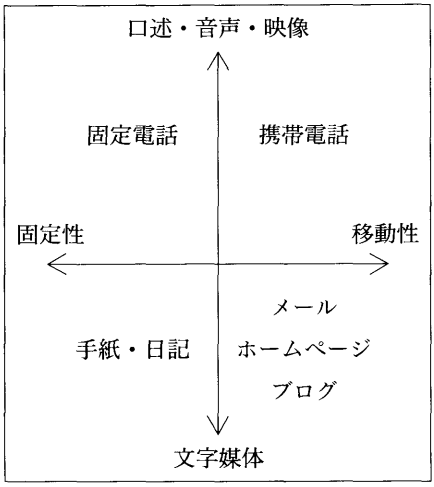


図2　パーソナル・メディアの類型



的な変数である。たとえば、ノート型のパソコンは、携帯メールよりは固定的であるが、移動に耐え得ないわけではない。長い文章の場合には、携帯メールよりは適している。また、デジタル・カメラや写メールなど映像も瞬時に送ることができるし、テレビ電話なども将来もっと普及する可能性も強い。その意味で、技術革新は左から右側へ、下から上へと動いていると思われる。移動性と「軽薄短小」の技術革新が結びついているものであろう。

次に若者が先導するメディア空間の変容について考えてみたい。今までのメディア空間に着目すると、「ウォークマン」によって、歩きながら音楽を聞くという行為が若者たちによって通常になった。これは、都市空間とメディア空間の変容において革新的なものであった。マス・メディアによる音楽番組やレコード視聴などの大衆文化の享受は、自宅であり、自室という空間に限定されてきた。それが、移動空間が音楽によるメディア空間へと変容し、しかもカセットテープによる個人選択（好みの音楽）が大幅に可能となったわけである。

そして、第二にパソコンによる「情報の発信」という革新である。パソコン通信から掲示板への「書き込み」、そして各人のホーム・ページやブログの作成へと情報の発信量は飛躍的に急上昇している。今では、若者たちの意見やホンネは、マス・メディアよりもブログや掲示板などへのアクセスによって把握することができる。日記形式の記録や語りなど、個人の匿名性を担保として多数の若者たちに共有されていると言える。そして、第三に携帯電話、携帯メールの「絶え間なき交信性」[7]である。「ウォークマン」「ＭＤ」によって、歩いたり移動したりする時間・空間が音楽視聴に使用されるようになり、そして携帯電話、携帯メールによって、移動時間、移動空間がコミュニケーションに使われだしたわけである。それによって、友人・家族との「絶え間なき交信性」が確保されることになった。もちろん、マナーモードや電源ＯＦによって、選択可能であるし、交信性を切ることもできるわけだが、前提としての「絶え間なき交信性」が確保されているという安心感が実は根底において重要な

のである。若者たちのコミュニケーションの特徴は、選択可能であるという感覚である。つまり、「つながっている」という感覚は、情報の送り手、受け手の相互作用であるが、いつでも「切れる」関係性が今、保持されているところに価値があるのである。そこには、地縁、血縁、学校縁などの選択不可能な縁から、個人の選択可能な友人関係の縁へと変容させていきたいという志向性が窺えるように思われる。

このように、メディア空間の変容は、若者たちの社会関係を変貌させ、都市空間の変化とも重なっている。場所や地域に限定されないバーチャル・コミュニティが構築され、若者たちはパーソナル・メディアを使用しながら、バーチャル・コミュニティへと自由に参加していく。携帯電話やパソコンなどのメディアは決定的に重要であり、実際に会って話せる生身の友人たちでありながら、あるいはそれゆえに、携帯メールでいつでもつながっていることが「友だちの条件」でさえある。あるいは、グローバルな情報や目に見えない仮想のコミュニティへの参加もパソコンで可能にしてくれるわけであるから、自室への「引きこもり」、パソコン画面への執着は、逆に外の世界へと「つながっている」という感覚なのである。

それでは、実際の都市性や都会性と地方性や田舎性は彼らの中ではもはや、時代遅れなのであろうか？　実は、必ずしもそういうわけではない。今の若者たちの中にも、大都市と地方、都会と田舎の区別は歴然とついている。東京を中心とする大都市では、現実にメディア空間の変容を体験することができる。お台場の臨海副都心開発、六本木ヒルズのＩＴ化、超高層ビルや超高層マンションの林立など、マス・メディアの時代からパーソナル・メディアの時代へと変貌してきても、都市空間自体は大規模プロジェクトや開発によって変貌していく。もしも、大都市がインナーシティ問題で疲弊し、老朽化し犯罪や貧困などによって、人が恐がって寄り付かない空間へと変貌していたならば、東京の持つ魅力や若者たちを引き付ける力も出てこなかっただろう。しかし、現在の東京はマス・メディアの力も未だ衰えていないし、さらにその上に、パーソナル・メディアによる情報の一極集中も

起きている。本来は、情報の発信性や個人性からして、パーソナル・メディアの隆盛は、地方分散型、すなわち、豊かな地方の創造につながらなければならないはずであった。しかし、現実には地方の若者たちは、パソコンの時代、携帯の時代になっても、相変わらず、東京へ憧れ、東京へと出て行くことをやめてはいない。

バーチャル・コミュニティや個人からの情報発信を獲得した現代の地方の若者たちにとって、東京はどんな意味があるのだろうか？　確かに、東京の情報は早く入手できるようになったし、実際に行かなくても、渋谷や原宿が「わかる」ようにはなってきている。しかし、若者たちは、身近な友人たちの世界で生きている。携帯のコミュニケーションも東京へと移動できる可能性を常に持っているわけである。一人の友人が東京へ行けば、それは、地方の人たちにとっては、何倍もの「憧れ」となって、情報がバーチャル・コミュニティを駆け巡るわけである。逆のことも想定できる。東京の若者は、地方へ、田舎へ行くことによって、実際の東京とは異なった「田舎性」をパーソナル・メディアを通じて沢山の友人たちに伝えることができる。このことは、確かに東京と地方の差異を小さくし、コミュニケーション・ギャップを埋めることにもつながっている。しかし、その反面で、東京はやはり「東京」であり、田舎はやはり「田舎」であるという差異を強調することにもつながっている。それでは次に、都市の匿名性と下位文化について、近年の都市社会の変化やメディア空間の変容を踏まえて考察していきたい。

四　匿名性と下位文化

(一)　都市の匿名性の意義変化

都市における匿名性の問題は、G・ジンメル以来都市社会学にとって馴染み深い議論であるが、若者のサブカ

ルチャーとの関連で改めて考えていきたい。都市への人口集中と都会における複雑性、打算性、匿名性、解放性、創造性などのいわゆる「都市的パーソナリティ」とは相互関係が存在している。しかも、大都市ほど若者の人口集中の度合いは高く、それによって若者世代特有の下位文化（サブカルチャー）を創造する確率は大きくなるわけである。例えば、ロック・ミュージックのハード・ロック、ヘヴィ・メタなどの音楽ファンがライブ・ハウスに集まるというサブカルチャーを考察の対象としたとすると、東京、横浜、大阪、名古屋、福岡など大都市ほどそのようなファンの集まる可能性は高いし、何といっても東京に集中するだろうことが予想される。

シカゴ学派のL・ワースは、都市の定義として、人口の規模、密度、異質性の三要素から、都市ー農村連続体説に則って都市度（都市化の変数）を計る方法を提起している。そして、ワースを継承しているクロード・S・フィッシャーは、人口の密度と異質性という変数は捨てて、人口規模だけに限定して都市度を考えている。シカゴ学派以来の都市の「匿名性」の議論は、基本的にこの「人口規模」を土台としている。したがって、人口規模が大きい都市ほど匿名性が高く、下位文化を作りやすいと考えられている。

しかし、現代のメディア社会、ネットワーク社会においては、ネットワークにおける「匿名性」が下位文化を形成していく力となっている。インターネットなどのネットワークへのアクセス（参加）は、ハンドル・ネーム（HN）など個人の匿名性が守られている。その中で、個人が住んでいる地域とは何の関係もなく、人口規模変数とも関連はなく、下位文化にアクセスすることができるわけである。インターネットなどのネットワークの中では、HNだけで実際にどこに住んでいる誰なのかわからなくても、コミュニケーションを重ねていくことができる。この「匿名性」は、大都市の中に紛れ込む「匿名性」とは質が異なっているものと思われる。人口規模をもとにした「匿名性」の場合、近隣にしても、家、家族、町内など知っている人々が相対的に少なく、大都会の人の渦の中に巻き込まれれば、「見知らぬ人々の世界」が自らを覆っていくという、そのような匿名性であった。

ネットワークの中の「匿名性」は、自己選択的な匿名性であり、どの部分を「匿名」とするかについても、個人の選択決定権が働いている。したがって、意図的で選択可能な匿名性と言うことができる。

都市の匿名性の第二の意義変化は、匿名性の都市的性格において、解放性や創造性の面に比べると、匿名性の孤立感やリスク感の方がはるかに大きくなっているという点である。これは、都市化の時代がほぼ終了し、都市における人口の安定化が進んでいることとも関連している。都市における創造的で解放的な下位文化が後退して、逆に都市社会の危険性やリスク低減が課題となってきている。匿名であることが、人間の関係性において「距離」を置き、相手が誰であるかわからない不安や遠慮を感じているのである。もちろん、匿名であることによって、気安く開放的になる面もあるが、孤立感や不安を感じている面もある。ウルリッヒ・ベックは、リスク社会の様相を次のように述べている。「したがって、まさに、個人化した私的存在は、ますますはっきりと、個人化した私的存在が手出しすることのできない事情や条件に依存するようになる。それと並行して登場してくるのが、紛争状態や危険状態や問題状態であり、それらは、その起源や形態ゆえに、個人が手を加えることは困難である。それらには、よく知られているように、社会的、政治的に討議され争われている事項のほぼすべてが含まれる。すなわち、いわゆる「社会の網の目」をはじめとして、賃金と労働条件の交渉、官僚制の侵略に対する防御や教育機会の提供や交通問題の規制や環境破壊に対する防御等に至るまで含まれている。それゆえ個人化は、まさに、個人的な自立した生き方の余地をより狭くする社会的な制約の下でなされることになる。」[8] つまり、個人化が匿名性を増殖し、さらにシステム制御のリスクを上げていたわけである。

意義変化としての第三は、このような危険社会のリスク低減化が、都市空間をある種の「監視空間」として成立させていくわけである。金融機関を狙った犯罪などの都市型犯罪の増加や二〇〇一年九月一一日のアメリカ合衆国における同時多発テロの勃発以後、監視空間が「都市の網の目」に張りめぐらされることになってくる。監

視カメラが都市空間の匿名性を監視し、犯罪捜査の有力な証拠として利用されている。このように、匿名的であっても安全性の名のもとでは、情報は収集され、提供される。個人情報といえども、公共の安全のためには提供され、危険社会のリスクを低減していくことが優先されるわけである。このことは、都市化社会から危険社会へとポスト近代に移行しつつある現代社会の構造変動の現われであるのかもしれない。

㈡　下位文化と支配文化の境界喪失

匿名性自体が意義変化を起こしただけではなく、下位文化の方も近年は大きく変容している。サブカルチャー論については、幾多の議論があるが、ここでは、下位文化がドメイン・カルチャー（支配的文化）に対して、その境界線を喪失しつつあるという変化について論じていきたい。つまり、伝統文化＝支配的文化の文化的活力が下降してきたことと、下位文化として甘んじてきたサブカルチャーが資本主義化し、市場化するにしたがって、支配的文化と何ら変わらないような様相を示し始めた、と言うわけである。この点について、四つの点から見ていくことにしよう。

第一に、大衆文化／下位文化の境界喪失である。大衆文化は、大衆社会において主にマス・メディアなどの介在によって、大衆に複製可能な文化メディアを提供し、娯楽・余暇の楽しみを与えてきたものである。出版・雑誌・新聞、テレビ・ラジオ、映画、スポーツ、芸能、音楽など、今では大衆文化が扱う領域は非常に幅広くなり、大衆文化ではない文化を探すことのほうが困難であるくらい、大衆文化の広域化は進行している。かつては、大衆文化にまでは至っていなかったような、アングラ（アンダーグラウンド）や例えば学生たちだけのアマチュア文化を「サブカルチャー」と呼んでいたわけである。しかし、現在では様々なサブカルチャーがマス・メディアやパーソナル・メディアを利用して、不特定多数の大衆へと伝わっている。個人のパソコンによるブログでさえ、

マス・メディアに匹敵する「大衆」文化を形成する可能性を孕んでいるのである。

第二に、下位文化／オタク文化の境界喪失である。大衆文化との境界喪失が比喩的に言えば、「上」に対しての境界喪失であるならば、オタク文化との境界喪失は、「下」に対する境界喪失であるといえる。「オタク」文化は、一九八〇年代頃から、ある種のマニアックな趣味や少数の愛好者だけによって成立する偏向した下位文化（サブカルチャー）として指摘されてきた。[9] しかし、二〇〇〇年代に入って、インターネットが普及するとそれらの少数者の文化もネットワークによって日本中、あるいは世界中（グローバル化）につながっていくわけである。「オタク」という少数派がネットワークによって、サブカルチャー化していくのである。そうすると、一部では市場化していくし、「オタク」文化が「大衆文化」にさえ上り詰めていくわけである。逆に、下位文化の特徴が一種の「オタク」化した蛸壺化したものとしても見えてくるわけである。

第三に、若者文化／大人文化の境界喪失である。エイジング（加齢）現象としても、大人と子ども、大人と若者との間の境界が消失しつつある、という指摘はなされてきた。マンガや「ぬいぐるみ」（キャラクター商品）を手放せない大人たちや、逆に栄養剤を手放せないＯＬ（「親父ギャル」）など、どちらが大人でどちらが子どもかわからないという現象は明らかに境界喪失であろう。しかし、それだけではなくて、若者文化はかつて確実に、大人文化に対する「対抗文化」（カウンター・カルチャー）の様相を示していた。『緑色革命』のＣ・ライクやＲ・ローザックなどは、スクエアに対するヒップなど若者たちの対抗文化の思想を表現した。しかし、現代の若者には「対抗文化の思想」は、全く受け継がれていない。若者たちが特徴的だとすれば、それは、先端的な傾向や大人の先を行こうとする先走った傾向であるかもしれないが、それは決して大人に「対抗する」構えではない。むしろ、大人のほうが、若者を毛嫌いし（ユース・ホビック）、若者を排除していこうとしているのかもしれない。そのような中で若者たちによる「対抗文化」の創造などありえない。

そして、第四に資本主義文化による一種類の文化、統合文化の成立があるかもしれない。これは、しばしばアメリカナイゼーション（アメリカ化）と呼ばれている。ＪＫ・リッツァによれば「マクドナルド化」[10]、Ａ・ブライマンによれば、「ディズニー化する社会」[11]などいずれも特殊アメリカ的な合理化、アメリカ的文化への統合を指摘している。このように、さまざまな境界線が消失してきて、一種類の資本主義文化へと統合されていくと、そこには、市場競争において勝ち抜いていくことだけが価値とされる支配的文化が生成されていくことになる。このように、下位文化が支配的文化と一線を画するのではなくて、下位文化自体が支配的文化に組み込まれていく過程は、どのようにして進行しつつあるのだろうか？　次に、この点を見ていくことにしたい。

五　フラグメンテーション（断片化）と消費の全体性

下位文化がなぜ、どのようにフラグメンテーション（断片化）を起こしていったのか、その過程は興味深いものである。前述したように、若者文化というカテゴリーから出発した世代文化は、ある種の消費のターゲットとなっていく。サブカルチャーが大衆文化となり、また最初は一部のオタク文化だったものが、下位文化としての地位を得るようになると、市場ではそれぞれの下位文化間での差異化が必要になってくる。マンガ、コミック、アニメ、キャラクターなどそれぞれの作家ごと、ジャンルごとにファンの差異化が起こり、それがフラグメンテーションへと移行していくわけである。

また、一九九〇年代あたりから、アジア地域における大衆文化の相互交流が始まっている。最初に日本のアニメ、マンガ、歌謡曲、テレビ・ドラマなどが東アジア、東南アジアなどに輸出され、その傾向は、二〇〇二年の「冬のソナタ」（韓国テレビ・ドラマ）の大ヒットなどからいわゆる韓流ブームを引き起こし、二〇〇〇年代では

アジア地域における大衆文化の共有化が進行しつつある。このような、グローバリゼーションとハイブリッド・カルチャーの隆盛は、衛星放送の開始やハイビジョン放送、デジタル放送など技術革新に伴って起こっている、いわゆる「文化の越境」という現象である。国際労働移動や観光などの人の移動においては、言語の壁はまだかなり高いハードルになっていたが、メディアを利用した文化の交流においては、共時性が強く作用するようになってきている。したがって、従来の日本文化の典型であった、伝統的な文化観に取って代わって、ポケモンやピカチューなどのテレビ・ゲームのソフトが日本文化の典型として世界的に通用するようになるわけである。

さらに、「多文化主義」（Multi-Culturism）の影響が存在している。アメリカ合衆国、カナダ連邦、オーストラリア連邦などの移民国家において一九七〇年代あたりから移民の増加を背景にして、今までのホスト社会・文化への「適応主義」から多文化主義へと政策が移行してきた。これは、多数派の白人文化をアジア系やラテン・アメリカ系、黒人などの移民に対して押し付けるのではなくて、それぞれ移民固有の文化を尊重して、少数民族の文化の共存を図っていこうとするものである。このような、多文化主義政策は、教育や福祉、医療など身近な地域政策においても少しずつ実現している。このような多文化主義は、未だに移民国家ではなく、大量の移民労働者を受け入れているわけではない日本においても、外国人との共生において多文化主義が議論されるように、気分としてだけは、多文化主義の雰囲気が浸透しつつあるように思われる。

例えば、エスニック料理やエスニック・ミュージックなど世界中の文化の表面が紹介され、国際化の名の下で人々の関心の表層に入っていくわけである。こうした文化のパッケージ化は、それぞれの民族文化の複雑な言語・宗教・慣習などを捨象し、耳障りの良い多文化主義や文化のステレオタイプ的な理解によって、文化のフラグメンテーション（断片化）を進行させつつあるとも言える。このような、表面的なグローバリゼーションは、ハイブリッド・カルチャーの形成と文化のフラグメンテーション化を同時に進行させつつあるように思われる。

このような下位文化のフラグメンテーション（断片化）は、一方で越境する大衆文化の方向によって消費の統合性、全体性へと向かっていく。例えば、前述したアジアの大衆文化の相互交流は、日本、韓国、中国、台湾などの歌謡曲、ポップス、ロック、テレビ・ドラマ、マンガ、劇画、アニメ、テレビ・ゲーム、パソコン・ソフトなどあらゆる種類の大衆文化や複製芸術、下位文化などを融合させていく。それらは、市場化によって、少なくとも東アジアの大衆文化が消費の総合性、全体性を獲得していく過程でもある。この消費の全体性は、確かにサブカルチャーのフラグメンテーションという差異の構造を内包している。しかし、広告や商品イメージの強調によって、下位文化はますます商品化され、市場化されていくわけである。

六　都市空間のフラグメンテーションとミニ・東京

前述した下位文化のフラグメンテーション（断片化）と消費の全体性、市場化は、次に都市空間のフラグメンテーション（断片化）へと通底している。都市空間は、山の手―下町の区別や都心部、インナーシティ・エリア、郊外住宅地域など分化（differentiation）していくことは、シカゴ学派以来、よく知られている。盛り場の登場もデパート（百貨店）や映画館などの近代の都市大衆文化の隆盛と軌を一にしており、郊外住宅地域への基点となっているターミナル駅が盛り場として繁栄していくケースも多い。

ところが、最近の都市空間の変容は、地域性や場所性・歴史性を無視した再開発や超高層空間への変貌が目立っている。このような容積率の緩和、規制緩和の波に乗って、建設ラッシュに沸いている東京の都市空間の変容は、ある意味で資本主義文化一色に塗りつぶされそうである。そして、地方都市でも、どこへ行っても「ミニ・東京」文化が複製されていく。郊外文化においても、郊外の駅から続く庭付き一戸建ての住宅街や道路沿いの大

型スーパー・マーケット、マイ・カーによる休日の買い物や家族旅行などどこでも繰り広げられる画一的な郊外生活が存在している。

前述した盛り場文化は、様変わりしつつある。もちろん今でも渋谷、新宿、池袋、原宿、六本木など東京の盛り場は人出が多いが、近年の再開発、新規開発の一点スポットは、盛り場が場所・地域としての空間性を失って、超高層ビルやテーマ・パーク化したビル空間に凝縮されていく傾向さえ示している。表参道ヒルズや六本木ヒルズ、汐留、新丸ビルなど一点にスポット化された盛り場性が表面化している。また、世界都市・東京の性格についても、依然として「欧米ブランド」のシンボルは根強いが、アジア都市や無国籍都市の様相も示し始めている。都市空間のフラグメンテーションが、歴史性や地域性・場所性を有していた東京が、資本主義文化の全体性、総合性によって地域性・場所性を剝奪され、どこにでも「ミニ・東京」を作り出したわけである。このような、断片化（フラグメンテーション）は、資本のグローバル化をバックに下位文化・大衆文化の越境とも関連して、アジア都市、無国籍都市の性格を持ち始めているのかもしれない。

七　若者文化の現代都市的可能性

今まで、「都市と若者」というテーマのもとで、都市空間の匿名性や若者のサブカルチャーの変容、若者の社会関係の変化について言及してきた。筆者は既に「若者」のカテゴリーからは外れていて、どこかに「若者文化」に対する距離感や違和感を感じているのは事実である。しかし、最後に若者文化に対して、現代都市的な可能性について述べてみたい。フリーターや非正規社員の増加は、若者たちにとっては「不本意ながらやむを得ず」そうなっている場合も多い。できることならば、常勤の正社員を狙っていても、なかなか思うように行かな

いということもある。現代の若者の労働／余暇のフレクシブリティ（柔軟性）は、望むと望まざるとに拘わらず、新しい社会関係や下位文化を形成していくかもしれないのである。性別役割分業の見直し、ジェンダー観の変化、夫婦関係、親子関係などの家族関係の変化、親密性の変容などそれらの兆候は様々な領域で表出している。第二に、若者たちの自発性（ヴォランティア）の重視である。ＮＰＯやＮＧＯなどのヴォランティア組織や活動への参加という側面だけではなくて、自己決定権や選択性の重視など日常生活における個人の意思の尊重というルールが徐々にではあるが、形作られているように思われる。[12] かつての「若者文化」は、若者集団による集団的規制や集合的な表出文化が主要なものであった。かつても若者たちの間には、実は多様な相違が存在していたはずである。しかし、支配的な若者文化に取り込まれてしまう要素も多かった。現代の若者文化は、逆に少数派であるゆえに、個人個人の自発性や自主性が尊重されている。第三に、盛り場などの都市空間における自由なストリート・パフォーマンスなど身近なストリート文化の可能性も発揮されている。第四に、若者世代の「散発性」、「非凝集性」ゆえに、逆に世代間ギャップを超越できる可能性があるとも言える。第五に、都市空間における情報メディアの縦横無尽なネットワークの形成である。携帯電話や携帯メールの利用は、移動時間や移動空間をコミュニケーションとして活用し、どこにいても誰とも「つながっている」という状態を現出させている。都市の社会関係や若者たちのメディア関係が新しいものに変容しつつあることを示しているのかもしれない。第六は、ジェンダー要素の可変性である。現代の若者にとっては、ゲイやレズビアンなどの同性愛だけではなくて、異性愛者においても、ジェンダー要素は可変的なものとなり、父親の育児休業や性別役割分業の克服、「専業主夫」など多様なジェンダーのあり方が模索されている。最後に、若者たちは、労働や年金や福祉などの分野において、少子高齢化における犠牲者の位置にある。確かに、世帯収入においても、税負担においても、老親の介護においても、高負担・高リスクのある世代である。しかし、このような転換期の若者文化は、従来の下位文化とは異なっ

て、新しい下位文化の再創造の可能性も秘めている。つまり、多世代、多文化の市民意識や公共意識に基づいた、新しいパートナーシップや自由・平等の精神を顕現することができるかもしれないわけである。[13]

都市社会の匿名性は、このような公共的市民意識の形成に寄与できるものでなければならないと思われる。

（1） 本稿は、有末賢「都市空間の匿名性と若者の社会関係――フラグメンテーションと下位文化」『日本都市社会学会年報24』「特集論文　都市と若者」（日本都市社会学会編、ハーベスト社、二〇〇六年九月、四二―五五頁）をもとにして、一部加筆修正された原稿である。

（2） 小谷敏「「見捨てられた」若者たち――情報過剰社会の世代間断絶についての一試論」『社会学年誌』（早稲田社会学会）四六号、二〇〇五年三月、三九―五三頁参照。

（3） Vanhove, N. and Klaassen, L.H., *Regional Policy: A European Approach*, Saxon House, 1980.

（4） David Clark, *Urban Decline*, Routledge, 1989, p 9. また、奥田道大『都市と地域の文脈を求めて――二一世紀システムとしての都市社会学』有信堂、一九九三年、二〇三頁も参照。

（5） 有末賢「都市化の構造と「郊外化」現象」『都市問題』（東京市政調査会）第九三巻第五号、二〇〇二年五月号、三―一四頁、参照。

（6） 有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化――余暇と自己実現を中心に」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会編）第六七巻一二号、一九九四年、五五―八八頁、参照。

（7） Janes E. Katz & Mark Aakhus (eds.), *Perpetual Contact*, Cambridge University Press, 2002.（ジェームズ・E・カッツ／マーク・オークス編、［立川敬二監修・富田英典監訳］『絶え間なき交信の時代――ケータイ文化の誕生』NTT出版、二〇〇三年）

（8） Ulrich Beck, RISIKOGESELLSCHAFT: Auf dem Weg in eine andere Moderne, Suhrkamp Verlag, 1986.（ウルリヒ・ベック［東廉／伊藤美登里訳］『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局、一九九八年、二六〇頁。

（9） 岡田斗司夫『東大オタク学講座』文藝春秋、一九九九年、東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た

日本社会』講談社現代新書、二〇〇一年、など参照。

(10) George Ritzer, *The Mcdonaldization of Society*, Revised Edition, Pine Forge Press, 1996.（ジョージ・リッツア［正岡寛司監訳］『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、一九九九年）

(11) Alan Bryman, *The Disneyization of Society*, Sage Publications, 2004.

(12) 有末賢「再帰性と自己決定権――ポストモダンと日本社会」田中宏・大石裕編『政治・社会理論のフロンティア』所収、慶應義塾大学出版会、一九九八年、二五一―二八三頁、参照。

(13) 有末賢・関根政美編『戦後日本の社会と市民意識』（叢書　２１ＣＯＥ―ＣＣＣ 多文化世界における市民意識の動態　7）慶應義塾大学出版会、二〇〇五年、参照。

文献リスト

有末賢「戦後日本社会の価値意識の変化――余暇と自己実現を中心に」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会編）第六七巻一二号、一九九四年、五五―八八頁。

有末賢「再帰性と自己決定権―ポストモダンと日本社会―」田中宏・大石裕編『政治・社会理論のフロンティア』所収、慶應義塾大学出版会、一九九八年、二五一―二八三頁。

有末賢「都市化の構造と「郊外化」現象」『都市問題』（東京市政調査会）第九三巻第五号、二〇〇二年、三―一四頁。

有末賢・関根政美編『戦後日本の社会と市民意識』（叢書　２１ＣＯＥ―ＣＣＣ 多文化世界における市民意識の動態　7）慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。

東浩紀『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』講談社現代新書、二〇〇一年。

Ulrich Beck, RISIKOGESELLSCHAFT: Auf dem Weg in eine andere Moderne, Suhrkamp Verlag, 1986.（ウルリヒ・ベック［東廉／伊藤美登里訳］『危険社会――新しい近代への道』法政大学出版局、一九九八年。）

Alan Bryman, *The Disneyization of Society*, Sage Publications, 2004.

David Clark, *Urban Decline*, Routledge, 1989.

James E.Katz & Mark Aakhus (eds.), *Perpetual Contact*, Cambridge University Press, 2002.（ジェームズ・E・

カッツ／マーク・オークス編、［立川敬二監修・富田英典監訳］『絶え間なき交信の時代――ケータイ文化の誕生』NTT出版、二〇〇三年）
小谷敏「「見捨てられた」若者たち――情報過剰社会の世代間断絶についての一試論」『社会学年誌』（早稲田社会学会）四六号、二〇〇五年三月、三九―五三頁。
岡田斗司夫『東大オタク学講座』文藝春秋、一九九九年。
奥田道大『都市と地域の文脈を求めて――二一世紀システムとしての都市社会学』有信堂、一九九三年。
George Ritzer, *The Mcdonaldization of Society,* Revised Edition, Pine Forge Press, 1996.（ジョージ・リッツア［正岡寛司監訳］『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、一九九九年）
高橋勇悦編『青年そして都市・空間・情報』恒星社厚生閣、一九八七年。
高橋勇悦・川崎賢一編『メディア革命と青年』恒星社厚生閣、一九八九年。
高橋勇悦・藤村正之編『青年文化の聖・俗・遊』恒星社厚生閣、一九九〇年。
高橋勇悦・内藤辰美編『青年の地域リアリティ感覚』恒星社厚生閣、一九九〇年。
Vanhove, N. and Klaassen, L.H., *Regional Policy: A European Approach*, Saxon House, 1980.